◆科学を離れた、カルト同然の「心理学」の危うさ

●十一月某日

旧聞に属する話柄だが、一月以上前に産経新聞に精神科医の作田明氏の『「心理学用語」の誤った使い方』という論考が掲載されていた（二〇〇八年九月三〇日付朝刊）。

作田氏によれば、「デジャブ」「PTSD」「多重人格」といった心理学ないしは精神医学の用語が、マスメディアや世間では不当に拡張されたり、酷く歪曲されたりして、拡がっているという。

しかし、誤伝は言葉の問題だけではない。近刊の鈴木光太郎『**オオカミ少女はいなかった**』（新曜社）は、人口に膾炙した心理学的「神話」を取り上げ、丁寧に検証している。

表題の「オオカミ少女」とは「幼児の頃より狼によって育てられた少女が実在し、八歳で人間に保護されたものの、狼によって刷り込まれた習性は抜けなかった」という事例に由来する。これが完全な虚構だったのだ。然るに、いまだにこの作り話が早期教育推進論の傍証として取り上げられることがある。

こういうエセ心理学の影響は単に学問的なミスティクに留まらない。作田氏の論考でも懸念されているが、最悪の場合、司法判断にまで影響を齎す可能性がある。

エセ心理学が社会問題化した例として最も有名なのが、一九八〇年代後半から九〇年代前半に掛けて、アメリカで燎原の火のように拡がった「偽りの記憶」回復運動である。

この頃、アメリカではセラピストによる催眠術などによって「抑圧された記憶」を無意識から取り出すという心理療法が流行していた。だが、そうして作為的に想起させられた「記憶」とは他の記憶やファンタジーが綯い交ぜになったもので、本当に起こった事実とはいえない。それを「真の記憶」であると誤認したところから、一気に問題は深刻化していった。

「幼児期の性的虐待」と関連づけられて、「偽りの記憶」を甦らされた人々が、自分の老親や兄弟姉妹を虐待者として告発するケースが爆発的に増大したのだ。

というわけで山田美保子さん。「名前出さなかったんだから、いいじゃな～い」って、あのね。罰に写真を撮る

無論、精神医学や心理学の世界でも大論争が巻き起こった。結局、九〇年代後半に冷静な科学的知見に基づいて、心理学的誘導で想起された「記憶」に虐待の有無を確定できるような証明力は認められないという結論で、ほぼ決着をみた。

このプロセスは専門書はいうに及ばず、一般の疑似科学批判本にも詳述されている。本欄でお馴染みのロバート・T・キャロル『**懐疑論者の事典**』（上巻　楽工社）やマイクル・シャーマー『**なぜ人はニセ科学を信じるのかI**』（ハヤカワ文庫）を是非参照されたい。

要するに、各種オカルトやホロコースト否定論、創造科学などと同等の扱いなのである。

ところが日本では、最近出た子供への性的虐待をテーマとする新書に、何の反省もなく、堂々と「抑圧された記憶」擁護論が載っているので魂消た。

科学を離れた「心理学」などカルトやスピリチュアルの類と寸分も違わない。

●十一月某日

日テレで山田美保子女史にバッタリ。七月の山本モナ騒動真っ最中の「週刊新潮」のコラムで、モナに下心のあった「有名評論家」扱いしてくれたことに、こっそり「御礼」を申し上げる（笑）。

みやざきてつや　1962年福岡県生まれ。主著に『新書365冊』（朝日新書）、『1冊で1000冊』（新潮社）、宮台真司氏との対論『M2 われらの時代に』（朝日文庫）がある。ちなみに……仏頂面とは「仏頂尊」という知恵に優れた仏の面相に由来する（他説あり）。